

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：82512

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17007

研究課題名(和文)非西洋国際関係理論の発展におけるトルコの貢献

研究課題名(英文)Turkish Contributions to Developing Non-Western International Relations Theory

研究代表者

今井 宏平 (IMAI, KOHEI)

独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・地域研究センター中東研究グループ・研究員

研究者番号：70727130

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、既存の西洋中心の国際関係理論に対する非西洋の国際関係理論の台頭に焦点を当て、他の非西洋地域と比較してその検証が進んでいない中東地域の国際関係理論について、トルコの貢献を中心に明らかにすることであった。

本研究では、西洋起源の国際関係理論を非西洋地域の分析に適用する際に生じる「ずれ」を可視化したうえで、非西洋諸国が西洋起源の国際関係理論を受容する中で創出される独自の視点、そして当該地域・国家・社会の中から創出または発見される自前(homegrown)の理論と思想の国際関係理論への活用に取り組んだ。3年間の研究期間で自前の理論と思想の発見までは目的をかなりの程度達成することができた。

研究成果の概要(英文)：Robert Cox's famous statement that "theory is always for someone, for some purpose", the key issue in non-Western international relations theory (NWIRT) concerns "whose perspective". Perspective from West or core states, non-West or periphery is only object of case studies in international relations. Perspectives from the non-Western world are necessary for the development and enrichment of international relations theory.

This study aims to explore Turkish contributions to developing theory of international relations as a case of NWIRT. First step is to analyze the process of how Turkey being accepted Western based international relations theory. Second step is to analyze "homegrown" theory from non-Western regions or states, based on local knowledge that emerged from, or was created by, various regions, religions, or ethnic cultures. During three years, I could achieved first step. For second step, I could find key concepts and movements within Turkish intellectual history.

研究分野：国際関係論

キーワード：非西洋の国際関係論 トルコ ホームグローン 西洋中心主義

1. 研究開始当初の背景

国際関係論は、1919年にウェールズ大学アヴェリストウィス校で初めて講義が行われて以降、アメリカの社会科学またはヨーロッパ中心主義と言われるように、極めて西洋色が強い学問体系として発展してきた。特にその理論に関してはほとんどがアメリカとイギリスにおける論争やいくつかの学派の考えが中心となってきた。1980年代から90年代にかけて台頭したヨーク(イタリア)学派、コペンハーゲン学派、ウェールズ学派なども結局のところ、西洋起源の理論であった。また、西洋、特にアメリカの国際関係理論は単に国際政治の説明を目的としているだけでなく、それがアメリカを中心とした西洋の知識人や政策決定者に影響を与え、現実の国際政治に反映されてきた。つまり、国際関係理論における権力関係が現実の国際政治の権力関係と相関関係を示してきた。

ところが、近年、現実の国際政治におけるアメリカの覇権の相対的な衰退と、中国をはじめとしたBRICsの台頭という権力関係の変化と関連し、非西洋の国際関係理論に注目が集まってきた。ただし、非西洋の国際関係理論が台頭したのはこれが初めてではない。1960年代から70年代にかけてはラテンアメリカ諸国の研究者を中心に、先進国の後発資本主義国に対する搾取を指摘した従属論が盛んになり、90年代にも冷戦期に「第三世界」と呼ばれた国々が国際関係理論にもたらすインパクトが議論されてきた。しかし、前者はマルクス主義的文脈に位置づけられ、後者は「第三世界」という枠組みが冷戦構造崩壊後にその意義を失ったため、非西洋の理論としては発展しなかった。非西洋の国際関係理論が本格的に注目を浴びようになったのは、2004年からアルレネ・ティックナー、オール・ウェーヴァー、デイヴィッド・ブラネイを中心に国際関係理論における「西洋」という枠組みを超える目的で始められた「国際関係論における地理文化的認識論」というプロジェクトと3巻にわたるその成果、そしてバリー・ブザンとアマタヴ・アチャリヤを編者とした共同研究の成果が登場してからである。例えば、2015年度のISA(International Studies Association)の年次大会のテーマは「グローバルな国際関係と地域世界」であり、非西洋の国際関係理論が中心的な議題となっている。日本においても、例えば、日本国際政治学会の英文機関誌International Relations of the Asia-Pacific誌や2009年に出版された日本国際政治学会編『日本の国際政治1』で日本や東アジアの国際関係理論について扱われている。

しかしながら、世界的にみて、これまで非西洋の国際関係論を牽引したのは、中国、日本、韓国という東アジア諸国にインドや東南アジア諸国を加えたアジアと、従属論や民主化の理論を発展させてきたラテンアメリカであった。それに対して、非西洋地域の中で

も中東やアフリカの国際関係理論に対する貢献を検証した研究は限定的であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、国際関係理論において新たな大論争となりつつある既存の西洋中の国際関係理論に対する非西洋の国際関係理論の台頭に焦点を当て、他の非西洋地域と比較してその検証が進んでいない中東地域の国際関係理論について、トルコの貢献を中心に明らかにすることである。近年、国際関係理論の分野でグローバルIRが注目されているが、筆者は、グローバルIRは既存の西洋起源の国際関係理論もしくは思想と、いまだに研究途上の非西洋の国際関係理論もしくは思想の上に成り立つ上部概念であると考えている。そのため、グローバルIRを解明するためには、まず非西洋の国際関係論に関する研究の蓄積が重要となる。本研究はその1つと位置付けられよう。

3. 研究の方法

本研究では、西洋起源の国際関係理論を非西洋地域の分析に適用する際に生じる「ずれ」の可視化とその「ずれ」を補うための調整、非西洋諸国が西洋起源の国際関係理論を受容する中で創出される独自の視点、当該地域・国家・社会の中から創出または発見される自前(homegrown)の国際関係理論・国際政治思想、という3つの点に関して、トルコを事例として段階的に検証を行なった。それらは主に、国際関係論における西洋中心主義批判および非西洋の国際関係論を扱った先行研究の整理、トルコの外交を分析する際に国際関係論の理論的枠組みを援用し、その部分で事例と理論的枠組みの間の齟齬が見られるかの検討、そしてトルコ自前の国際関係理論・思想を発券するためにトルコの知識人の活動および書物の検討であった。

4. 研究成果

本研究の研究成果として、大きく4点をあげることができる。

第1に、トルコの国際関係論の受容と発展の特徴を浮き彫りにしたことである。トルコにおける国際関係論の出自に関しては、英語とトルコ語で先行研究があるものの、より国際関係論の理論的潮流の発展と絡めて検証した。また、同じ非西洋諸国に分類される日本、そして西洋との結びつきは強いが、国際関係論が独自に発展しているオーストラリアにおける国際関係論の発展と比較した。その結果、トルコとオーストラリアは、批判理論やコンストラクティヴィズムという国際関係論の「第4の論争」の影響を強く受けているのに対し、日本は「第4の論争」よりも、リアリズムとリベラリズムの対立である「第1の論争」、方法論の問題を扱った「第2の論争」が依然として重視されていることを明ら

かにした(雑誌論文、学会発表、)。

第2に、国際関係論の枠組みからトルコの事例を説明する際に発生する「ずれ」を可視化した。非西洋諸国であるトルコの事例を西洋起源の国際関係論から分析する際の限界を示したともいえるだろう。例えば、バリー・ブザンとオール・ウェーヴァーは『地域とパワー』という共著の中でトルコなど、多様な地域と接する国家を分析する概念として「絶縁体国家(Insulator State)」を提示した。ブザンとウェーバーの「絶縁体国家」はトルコがヨーロッパと中東の安全保障の問題もしくは脅威を遮断する役割を果たすと説明された。しかし、トルコの側からみると、トルコは絶縁体の役割を選択的に担っていることがわかる。また、近年は絶縁体国家というよりも隣接地域の脅威を他地域に波及させる「トランジット国家」としての色彩が強くなっている。このように、トルコの事例研究を通して、西洋起源の理論もしくは概念の「ずれ」を指摘し、可能な場合は代替案を提示した(雑誌論文、学会発表、)。

西洋起源の理論・概念と非西洋地域の事例の間の「ずれ」を可視化したうえで、第3に、その「ずれ」を改善するための枠組みの調整を考案した。上述した絶縁体国家の代替案としてのトランジット国家の概念の提示もその1つの事例である。また、2017年に著した国際関係論の教科書である『国際政治理論の射程と限界』において、既存の西洋中心の諸理論に欠けている内政の考慮、非歴史性、西洋世界と非西洋世界との断絶を補うことができる理論的枠組みとして、対外政策分析、歴史社会学、非西洋における国際関係論の思想と枠組みを取り上げた。さらに、足立研機編の『セキュリティ・ガバナンス論の脱西欧化と再構築』においては、西欧で発展してきた、主権国家だけでなく、地域機構やNGOといった多様なアクターが協力して安全保障に関するガバナンスを達成しようとするセキュリティ・ガバナンスの議論は、実は非西欧(非西洋)地域においてこそ重要であり、既存の議論に厚みを持たせることができるという共通意識の下、トルコの事例を通してセキュリティ・ガバナンスの理論の拡張を試みた(雑誌論文、図書、)。

第4に、トルコ独自の国際関係論を構築するために近年受容されている批判地政学と英国学派について理解を深めるとともにトルコの現実政治との接点を通してその枠組みの拡張もしくは応用可能性を検証した(雑誌論文、学会発表、その他)。

当初予定していた研究計画の中では、非西洋地域における自前の国際関係思想もしくは理論に関して、具体的な成果をあげることができなかった。ただし、トルコにおける知識人の活動と運動については概観し、1930年代に左派知識人のサークルとして誕生したカドロ運動が国際関係理論の従属論を先取りしていたという仮説を立てて今後、検証す

る予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

Kohei IMAI, “Rethinking the Insulator State: Turkey’s border security and the Syrian civil war”, 査読有, *Eurasia Border Review*, Vol. 7, No.1, March 2017, pp. 19-29.

DOI: 10.14943/ebr.7.1.19

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicatn/eurasia_border_review/Vol71/02-Imai.pdf

Kohei IMAI, “Middle Eastern Contributions to International Relations Theory: Turkey as a Case Study”, 査読なし, *IDE Discussion Papers*, No. 629, March 2017, pp. 1-16. <http://www.ide.go.jp/English/Publish/Download/Dp/629.html>

今井宏平「オフショア・バランスの理論的考察」, 査読なし, 『法学新報』「滝田賢治先生古稀記念号」第123巻、第7号、2017年3月、211-230頁。

今井宏平「アメリカを見据えた協調と対立 トルコと中国の限定的な関係」, 査読なし, 『中国研究月報』Vol.70, No.7 (No. 821)、2016年7月、1-11頁、査読なし。
今井宏平「研究ノート：トルコにおける地政学の展開 国家論と批判の狭間で」, 査読有, 『境界研究』6号、2016年3月、113-135頁。

DOI: 10.14943/jbr.6.113,

<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/61121/2/05Imai.pdf>

[学会発表](計7件)

Kohei IMAI, “An analysis for the conditions of ceasefire-The case of Turkish government and PKK-”, 3rd International Kurdish Conference: Kurdish Futures In and Outside of Iraq, Syria, Turkey, and Iran: Fresh Hopes or New Tragedies?, Exeter, 26 June, 2017.

Kohei IMAI, “Turkey and Border Security”, 24th IPSA World Congress Political Science, Poznan, 28 July, 2016.

Kohei IMAI, “Shumei Okawa’s alternative -Western world order -One of the cases of homegrown non-Western IR theory”, ISA Asia Pacific Hong Kong 2016, Hong Kong, 25 June, 2016.

今井宏平「トルコの国境管理政策：シリア国境とギリシャ国境での活動を中心に」日本中東学会第32回年次大会(2016

年 5 月 14 日、慶應義塾大学三田キャンパス)

Kohei IMAI, “Re-emergence of ‘Pax-Ottomanica’?: Turkish Perspective on ‘regional International Society’ and its Nature”, (With Kazuhiro Tsunoda), 57th ISA Annual Convention, Atlanta, 19 March, 2016.

Kohei IMAI, “How IR Major debates have effected to Western-Oriented Asian States -The cases of Turkey, Japan, and Australia-”, The International Convention of Asia Scholars (ICAS) 9, 6 July, 2015.

Kohei IMAI, “Is Turkey’s IR non-Western IR theory?”, 14th METU Conference on IR, Middle East Technical University, Ankara, 17 June, 2015.

〔図書〕(計 5 件)

今井宏平「シリア内戦において「消極的平和」を模索するトルコ」足立研幾編『セキュリティ・ガバナンス論の脱西欧化と再構築』ミネルヴァ書房、2018 年 2 月、312 頁(205-229 頁)。

今井宏平『国際政治理論の射程と限界』中央大学出版部、2017 年 9 月、全 152 頁。

今井宏平「アイデアをめぐる闘争 『文明の衝突』 フレームに対抗する 『文明間の同盟』 」大庭弘継・角田和広編『超国家権力を構想 / 批判する：不確実性と脆弱性の探究』、南山大学社会倫理研究所、2017 年 3 月、253 頁(61-77 頁)。

今井宏平「新興国トルコの国際秩序観 その特徴と変遷」滝田賢治編『21 世紀国際政治の展望』中央大学出版部、2017 年 3 月、260 頁(227-246 頁)。

今井宏平「中東地域における現代国際政治 アクター・構造・システム」後藤晃・長沢栄治編『現代中東を読み解く—アラブ革命後の政治秩序とイスラーム』明石書店、2016 年 8 月、272 頁(51-74 頁)。

〔その他〕

翻訳：バリー・ブザン(大中真、佐藤誠、池田文佑、佐藤史郎、安高啓朗、井上睦、今井宏平、千知岩正継、小松志朗、角田和広、池田亮訳)『英国学派入門』第 7 章担当、日本経済評論社、2017 年 5 月、129-150 頁。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

今井 宏平 (IMAI, KOHEI)

独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・研究員

研究者番号：70727130